何しろ意外の喜びに家中のぼせ上つてゐる時なので、一高生もお喜びの福分けとばかり紅茶だケーキだと大いにもてなされ、そのせいか相當にねばつて次男を閉口させた。彼は中學ではサッカーをやつてゐたが、本當はテニスがやりたいのだつた。

「テニスをやる積りだといつたら、そんな大きな軀、テニスなんかにや勿體ないつていふんだよ。」

さういつて次男は笑つた。その晩はそれですんだが翌日からが大變である。陸上競技が來るサッカーが來る、ラグビーが來る、バスケットボールが來る、またボートが來る、といつたやうな續々と勸誘員の御入來に、軀は大きいが氣の弱い次男はすつかり困り切つて、朝から外へ出てしまつて成べく會はない算段をした。そのくせ皮肉なことに待つてゐたテニスは最後まで來ず、彼は到頭サッカーにはいつたのである。

彼は卒業まで蹴球部にゐた。私は高等學校といふ、女には全然ない樂しい時代を持つ男の幸福を、しみ〴〵羨しいものに思つた。殊に三年間の寮生活も選手であるが故によけい樂しさうであつた。それは一つのスポーツを通じて結ばれる友誼が、本質的に團體生活の精神に最もよく適つたものであるからだらう。

だが、それは選手として心身共に適當な條件を備へた場合のことである。心理的な方面はしばらく措き、一旦選手が健康を害したとなると、今まで彼を樂しませた環境は一變して、生身を削るやうな責道具になつてしまふ。私の子供も一度輕い肺炎をしてその後が暫く思はしくなかつた。醫者はもちろん選手はやめろといつたが、それがその通り行かないのである。

部としての利害得失や、それに連帶する部員としての責任感は、個人の健康問題を超えて選手の自由を束縛する。そしてそこに目に見えた肉體的過勞を負ひ續けなければならないといふ不合理な結果を招來する。そのまた結果はどんな悲劇を來たさうとも、それは誰も責任を負ふ人がない。幸ひ私の子供の場合は間もなく健康を恢復したので、事なきを得たけれども——。

近所の某家では帝大入學早々の息子さんが、胸を病んで氣の毒にも半年くらゐの中に亡くなられた。死後その日記を讀むと、靜岡高校在學中にバスケットボールの主將で、身體に惡いと知りつつ無理を重ねて來たことが知れ、父親は悲憤の涙を流して極力選手制度を呪つた。

「校長に手紙をやつたのに返事もよこさなかつた。」

かういふ父兄の聲に學校當局はもう少し耳を傾けてはどうかと思ふ。高校の自治は大變結構だけれども、一方にかうした不合理さがほつておかれて、スポーツが身を亡ぼす本末顚倒の悲劇が、父兄の呪詛の的になつてゐるのを、知らぬ顏の半兵衞では、何としてもひど過ぎる。

しかしこれは二三年前のことだから、今は定めしもつと合理化されてゐるだらう。この事は獨り高校ばかりの問題ではないからである。（昭和十四年）

その折りく

文學雜感

文學といふもの〻考へ方は時代によつて隨分いろいろと變つてゐる。それは文學その者の本質とは別な一種の時代色である。古い昔はさておき、私達の女學生時代と今日を比較して見ても、それは甚しい相違である。一口にいへば今から二三十年前までは、文學といふものは世道人心に害こそあれ益のないもの、といふ解釋が一般的であつた。文學――殊にそのなかでも一番主な代表者である小說の如きは、士君子の讀むべからざるものであり、敎育家の目の敵であり、眞面目な家庭に入れてはならないものとなつてゐて、自然そこに小說は隱れて讀むものといふ定義が生じた。今日の四十五十の方々が娘時代を振返つたら、誰でもきつとさう思當るに違ひない。天外の「魔風戀風」や風葉の「青春」が女學生の戀愛を扱つて、大に敎育家の心膽を寒からしめた時代のことである。

をかしなことに、私達が目白に學んだ頃は、文學を專攻しながら、しじう文學にひけ目を感じ

させられるやうな立場にあつた。だから「何のために文學を學ぶか。」といふ問ひに對して「文學によつて社會を救ふ。」とか何とか、身の程知らずの大言壯語をしてゐたわけだが、それは要するに文學が最終の目的でなしに、手段であるとの辯解だつたのである。「世の中の意になる小說ならまあ書いても差支ない。」といふ程度のお目澪しが、當時の教育家の文學觀であつた。

私はその後の教育家の頭がどう變つたか知らない。併し世の中の方は確かに一變した。その契機になつた一頃の左翼文學はもう影もないが、文學が政治的社會的意義を持ち、文學者が有閑的存在から國策の片棒を擔ぐまで進出したことは、在來の日本文學史に曾て見ないことだと思ふ。これも文學その者としては手段のために使はれてゐるともいへるが、それは畢竟文學の力が認められたからである。私達の娘時代のやうに、無視されたてゐ文學を強いて意義づけようとしたのとは、根本的に理由がちがつてゐる。

目白の女子大學からは不思議に女流作家が出て來ない。これは素質の問題か教養の問題か、それとも學校の雰圍氣の然らしめるところか、何としても淋しいことだ。四十年の歷史を持つ目白から、眞に文學を愛し文學に生きる女流作家が、もつと澤山生れてもよい時ではないかと思ふ。

庭の一隅から

私はこの頃ひまさへあれば土いじりしてゐる。ひまがあればといふのはまだ體裁のいい言葉で、實は何をおいても先づシャベルを持つて庭へ出るのが、私の一番大事な日課のやうになつてしまつた。雨が降れば降るで傘をさしても一遍は庭を歩いて見ないと氣がすまない、といふと知らない人はどんな廣大な庭園かと思ふだらうし、知つてゐる人はあの庭の何處を歩くのだと笑ふだらう。だが笑ふ人は笑へ、私にはそれが一番樂しい幸福な時なのである。早春ヒヤシンスの甘い香が風に漂ひ初める頃から初夏にかけて、庭の仕事はなかなか忙しい。眞夏となればもはや一面の八重葎で手のつけようもなくなるから、今の中にせつせと花壇の手入れをしてゐるのである。

私の友達で御主人は大の園藝家なのに自分は少しも興味を持たない人がある。その友達は御主人に少しは手傳へといはれて「私はまだ花を作る程年を取らないつて大威張りでいつてやつたのよ。」と私に話した。實際花作りなんてことは、人間的な或は世間的な鬪志とは凡そかけ離れた隱遁趣味で、その意味では私も年を取つたといはれても仕方がないと思つてゐる。又いつか私は或る座談會の席でつひ自分の庭の話をしてしまつたところ、一人の社會事業家に「私は自然なんてものにてんで關心を持たない、人間の事だけで一ぱいだ。」と苦々しくいひ放たれた事がある。その社會事業家の眼には、多分私のやうな人間は度し難い有閑人としか見えなかつたであらう。

私は青山に二十年餘も住んでゐるが、私の家の近くには大邸宅が隨分多い、往來を歩くとさうした邸の塀越しに櫻の並木が爛漫と花のトンネルを作つてゐたり、近頃では又色とりどりのつゝじがわざ〳〵外を向いて咲いてゐたりして、季節の花の美しさに目を樂しませる事が屢〻ある。さういふ時に私は金持もいいものだ。道行く人のためにまで花を植ゑておいてくれるとは思ふが、土管の中に住む人もあるのにこんな廣い地面を占有するとは怪しからぬ、うんと庭園稅でもかけてやれといふ氣にはなれないのである。つまりはさうした人間界の現實の諸相に拘はりなしに、自然の美しさに惹かれる氣持——その現實逃避の心理こそは、社會事業家の憎

しみを購つた所以であらう。

私はその社會業事家に向つて、貴女のもう一方の心の窓を御開きなさい、そしたら貴女はもつと潤ひのある人間になれるでせうなどと、餘計なおせつかいはいひたくない。と同時に私の土に親しみ花を愛する隱逸趣味を、どんな理窟によつてでも傷づけられたくはない。何故ならそれは私にとつて、一番不純なもののない幸福感だからである。

私も曾ては人間の事で頭が一ぱいだつた。

若い時、小説を書かうといふ野心に生きた時代は、あらゆる人間の生活を好奇の眼で探り、人間の心理といふ心理のどんなかけらも掻き集めたい欲望にのみ驅られて、それこそ自然なんか一顧にも價しなかつたのだ。けれども不幸にして私は小説が書けるより先きに人間ずれがしてしまつた。人間の心理は似たりよつたりのものだ。自分にあるものと人にあるものと違つたものはない。質のちがひではなく、たゞ分量のちがひだけだ——と何かそんな結論めいたものが出來てしまつて、今ではどんな人間にもたいして、興味が持てなくなつたのである。

私は今一番欲しないのは人の心に立入る事である。どんな人をもそつとたゞ眺めてゐたい。

眺めてゐる限り、人間も亦私にとつて盡きざる興味の對象であり得る。バスの中で美しい人と乘合せて、人知れずその美しさを鑑賞するやうな氣持でゐたい。棘のある薔薇か毒のある蝶かそこまでは觸れない方がよささうだ。

だから若しも出版記念會といふものに行つたら、テーブルスピーチを聞いただけで、後をも見ずに歸る事である。まご〳〵してゐて、つひたつた今ありつたけの美辭麗句で作者をほめ上げた人達が、散會後掌を返すやうに惡口をいふのを聞く程、興醒めた思ひのすることはない。

所謂インテリ婦人も昔の井戸端會議時代の女と、質に於て少しの變りもない。ただ違ふところは、いろ〳〵のポーズを巧みに使ひ分ける術を知つてゐるだけである。これを最も如實に見られるのが出版記念會風景であらう。そこでは凡そ良心的なものは、不必要なのである。

今は廣告の世の中、宣傳の世の中などゝいふだけ野暮であらう。女性の世界にも同じ潮流は流れてゐる。あらゆる場合に自分を表面に押し立てようとするのが、現代に卽した悧巧な處世術であり、どこまで押し切れるかが成功者と敗北者の岐れ目でもある。

今日では沈默の美、謙讓の德といふやうなものは、流行おくれの廢物でしかない。人がしや

べつてゐる中でぢつと沈默を守つてゐる人は、そのしやべつてゐる人以上のものを持つてゐるかのやうに思ふのは古い考へ方で、今では默つてゐるのはいふことがないから、いふべきものを持つてゐないからと解釋される。又自分が下積みになつて人を立てるといふ態度も、輕蔑をこそ買へ誰も立派だとはいつてくれない。能ある鷹は爪を隱すとは、凡そ現代に適用しない封建時代の消極主義である。今時爪を隱してゐる鷹なんか、鳶以下に評價されても仕方がないのである。

併しさういふ世の中にも人はさま〴〵な生き方をするものである。一人の戀愛至上主義者は私にいつもかういふのである。「でもねえ、あくせくして人を押しのけたり突飛ばしたりして豪くなつてもつまらないぢやないの、あたしはそれより素晴らしい戀愛がしたいわ、いいえ素晴らしい戀愛でなくつてもいいの、誰かを愛してゐる氣持で、あの人に會ひたいなと毎日さう思つて暮らしてゐるのが一番幸福を感じるわ。出世したいとも思はないし、いい着物を着たいとも思はなくはないけど、――そのためにせつせと働く氣にはなれないわね。でも愛してゐる人のない生活なんて考へてもみじめぢやないの。」

さういふ彼女はどんな貧乏の中にも平氣で落付いてゐる。彼女は文學的ないい素質を持ち、しかも事務的な才能も人に優れてゐながら、世間的には一向に芽を吹かないのである。私は彼女の中にいつでも夢と詩とを發見する。彼女はいくつになつても愛すべきロマンティストである。

だがこの功利主義の世の中にロマンティストの樂園はない。私は人間の鬪志を時にあさましいものとは思ひながらも、それが結局生きるためにはどんな才能にもまして必要なことをそぞろに感じるのである。（昭和十二年）

お茶の味・人生の味

私の母はお茶が何より好きだつた。母は生れつき慾の少い人で着物や食物には決して贅澤を望まなかつたが、たゞ一つの例外はお茶で、お茶だけはいつも上等のを缺かさず、さも愉しさうに味はふのだつた。亡くなる前は佐賀で病を養つてゐたが、病中も一日としてお茶は缺かさなかつた。餘命幾何もないと醫師に宣告されてから三年も保つたのも、或はお茶のヴィタミンCの力もあつたかも知れないと思ふ。母は東京の山本山のお茶が好きで私がいつも送つてゐた母は佐賀のお茶卽ち嬉野のお茶は、何だかアクが強くつて口に合はないといふのである。私はそれを多分東京人である母の一種の偏見だらう位に考へてゐたが、昨年靜岡の製茶を見學して嬉野のお茶と製法が違ふことを知り、成程と母の味覺に頷けたのであつた。

靜岡といへば母の家は幕臣で幼時靜岡に住んでゐたので、年を取つたら靜岡に隱居したいといふのが母の願ひだつた。それもはかない夢に終つたが、私も昨年初めて靜岡へ行つて、やはり母と同じ夢を抱きたいやうな氣持になつた。お茶の都靜岡は、いかにも餘生を託するのにふさうな土地である。

私は若い時はお茶の味が解らず、年中水ばかり飲んで母に笑はれてゐた。併し年と共にお茶が好きになり今では母に劣らぬ程お茶を愛してゐる。よその家に行つてもいゝおを出されると實に嬉しい。いゝお茶を好みのいゝ茶器にいれて味はふのは最も日本人らしい趣味だと思ふ。私はお茶器や菓子器を見れば大抵その家の審美眼が測れると思つてゐる。だが不思議なもので着物にはすぐれた調和の美を示しながら、お茶は俗惡な器に入れて平氣な人がある。私はどうもそんな人には何處かに、うるほひの足りなさを感じないではゐられない。事變になつていろいろの物の無駄があれこれといひ出された時、某の女史が日本の家庭にはいろんな茶器が有りすぎる、あんなものは無駄の骨頂だ、お茶碗は一種で澤山だといふやうな說を吐かれたが、それはその人が獨身で家庭の味を知らないからいへたことだらうと思ふ。丈夫でこわれる心配のない瀨戸引の湯呑が一つあれば經濟かも知れないが、そんなものでお茶を飲むわびしさは一寸やり切れない氣持がする。無駄をなくすといへば、とかく生活の餘韻も餘情もない殺風景なこ

とばかり考へる人に、先づ知らせたいのはお茶の味だ。お茶の味を知ることはやがて人生の味を知ることだと、私は本當にさう思つてゐる。

今年もやがて新茶の季節が來る。私は一年中で一番新綠の候が好きだが、その好きな季節の好きなものゝ中に新茶は又別である。あの香りのめでたさ、綠に澄む色の美しさ、肌の白い有田燒のお茶碗についだ新茶を陶然と味はふ愉しさは、瀨戸引の湯呑で出がらしの番茶を飲む人にはわかるまい。いや番茶ならまだしも、そのうち何か草の葉つぱの代用品でも結構といふ世の中になりかねないと思ふと、そゞろに情なくなつて來る。だが草の葉つぱでは心身の疲れを癒す新茶の摩訶不思議な力は望むべくもないであらう。疲勞恢復に高價なヴィタミンC劑を飲む位なら、新茶をたんまり召上れと私はさういひたいのである。（昭和十四年）

街のスポーツ

これから段々日ざしが暖かになり、草の芽が綠に萠える頃になると、きまつてあちこちの空地や草原で思ひ〳〵の野球試合風景が展開される。

さうした中に、小さいながらも揃ひのユニホームに身を固めた小學生のチームは、一寸大選手の面影があつて、生意氣で可愛らしく、思はず行人の足をとゞめさせるが、それよりも私は服裝なんかまち〳〵の大人子供の雜軍の中に、そこいらの洗濯屋の御用聞きや、酒屋の小僧さん達が一緒になつて、愉快さうにボールを投げてゐるのを見る程、自分も愉しい氣持のする事はない。

そこでは誰もみんな一樣にスポーツマンなのである。中學にも行けずに、毎日「こんちはア」と、台所口ばかり覗いて歩く御用聞きも、今日はすつかり職業苦を吹飛ばして、久しぶりに若さと自由さを取戻した樣な晴々しい顏をしてゐる――さう思つて、その和やかな試合を見てゐ

ると、何か私は世の中に一つの明朗さを見出したやうな、歡びを感じるのである。

それにしても、野球といふものは、よくもこんなに民衆化したものだと、今更のやうに驚きながら、その野球に完全にそつぽを向かれてゐる女の世界の淋しさを、そゞろ慘めに思はずにはゐられない。もつとも、時々女給チーム等といふスポーツ界の外道も飛出すやうだけれど、そんなものは問題の外として、女性にも男の野球に相當するスポーツがあつてもよささうなものだ。例へばテニスにしても、もつと手輕にもつと誰にでも出來るやうなわけには行かないであらうかと、私はよくさう考へる。

私は大變テニスが好きだ。それは私にとつてスポーツの面白さを、直接體驗した唯一のものだつたからであらう。けれども、それも今では一つの過去になつてしまつてゐる。それは勿論年と共に體力が許さなくなつたといふ大きな理由もあるが、もう一つには手近にコートがないといふことも、早くテニスを捨てざるを得なかつた理由である。だから世の中には、私よりもつと若く私よりもつとテニスが好きでありながら、同じ理由の下にラケットを握る機會もなくコートを馳けずり廻る代りに、デパートでもぶらついてゐる女性は、きつと限りなく澤山ある

に違ひないと思ふ。

考へて見れば、家庭婦人でテニスが出來るといふのは、自宅にコートのあるブルジョアの奥さんででもない限り、先づは絶望といつていゝであらう。お茶の水や田園のやうなテニス倶樂部も、一般女にとつては到底窄き門たるを免れない。私の家の近所にも貸コートがあつたが、その借賃の高いのには驚いて了つた。だから若し一つの夢を描くなら、せめて一區に共有のテニスコートが五つや六つはあつて、お嬢さんも奥さんも女中さんも、一緒にテニスをして遊ぶ——といふ世の中だつたら、女性の健康さは、心理的にも生理的にも、今に幾倍するのではないか知ら、少くとも女の愚痴やヒステリーは、スポーツに流す汗と一緒に、きれいに清算されるのではないかと、私はさう空想してゐる。

私が中年になつてテニスをしたのは、信州の千ケ瀧だが、もとは服裝などものんきなもので、洋服であれば何でもよかつた。今日スポーツ醫學に其人ありと知られた水町博士なども、その頃は一中の霜降ズボンに、縮のシヤツか何かで平氣なもの、今のおしやれの學生とは大違ひだつた。

おしやれも一つの進化には違ひないが、公式の試合の時は別として、ふだんは、さう一々眞白なズボンの折目を立てたり、白いスカートの皺を延ばしたりしないでもよくはないであらうか。服裝にこだはるのはスポーツの貴族趣味で、スポーツそのものの本質からいへば白い服だらうと黑い服だらうと、運動に便利でさへあれば構はないわけである。スポーツの民衆化は先づ服裝の自由より始めよと、これは御用聞の野球を見ながら、そゞろ頭に浮かんだ愚見である。（昭和十三年）

スポーツ鑑賞雜記

私はスポーツを見るのが大好きだ、これは多分昔テニスに夢中になつて、面白くて面白くて堪らなかつた氣持が、今でも心の一隅に潛在してゐて、スポーツを見ると途端に燃え上つて來るせいかも知れない。私はスポーツを見てゐるときほど、邪念を離れた氣持になることはない。それは競技そのものゝ面白さもあるが、それよりもプレーヤーの肉體と精神とが、一分一厘の隙もなく呼吸を合はして躍動するあの張切つた感じに打たれるのが、何ともいへず愉しいのである。まるで何か心のすみ〳〵まで清新な風が吹き拔けて、生活のゴミを拂ひ落して呉れるやうな、心底から爽やかな氣持が湧いて來る。

私がスポーツを見るのは、年に幾度と數へるほどしかないが、それでもそれは他のものでは得られない幸福感が味はへる。子供達に「何も知らない癖に面白がつてゐる」と笑はれても、私の面白さに變りはないのである。ラグビーやサッカーのルールが仲々呑込めずにゐても、私

は知識的にスポーツを見るのではなく、感覺的に見るのだからそれでもいゝと思つてゐる。

スポーツは個人的のものより、チームワークの方が見てゐて遙かに面白い。個人の力と力、技と技が鼻を突合してゐる競技は、興味が一點に集中されるだけに何か酷くあつけない感じだが、人間が大勢で場面の變化に富み、動きが複雜で先の見透しのつかないものは、面白味も波のやうに起伏があつてそれだけ餘計に樂しめる。テニスよりは野球、野球よりはラグビーの方が私は面白いと思ふ。

チルデンとヴァインズのテニスも見たが、テニスは上手な人がやればやる程、ボールのやりとりがまるで神經のやりとりみたいな感がありはしないであらうか。巧いなあとは思ひながらも、ボールの飛ぶ先々を追つて、プレーヤーの神經が絹絲のやうに細く強く、コートからコートへと張り渡されるやうな感じは少し息苦しい。永いラリーが一段落ついてホッとするのは、その絹絲がぷつりと切れた瞬間である。

蒿色に枯れ盡した芝生が、小春日和の和やかな日ざしを一面に受けて、踏めばフワリと蹠に跳ねかへる絨氈の柔かな感觸を想はせ、點々と銀杏の黄葉を綴る木立の上に、繪畫館のドームが巨人の頭のやうに此方を覗いてゐる晩秋の外苑競技場は、地上に捲き起る豪快なスポーツの雰圍氣とはまるで反對な靜寂さに落付いてゐる。この動と靜との對照は大變面白い。私はスタンドに腰を下ろすと、あらゆる騒音の一つ〳〵まで鑑賞するのが樂しみだ。競技に熱狂してゐる時の騒音には、皆何かの感情が伴つてゐる。

この秋は、蹴球戰を三度見た、早慶戰はよかつた、海老茶と黄の制服の美しい色彩が、撚れつ、ほぐれつ描き出す戰ひの圖は、男性的といふ一語に盡きるほど精力的で花々しくて、それでちつとも殺伐でないから不思議である。私の目の前にゐる慶應のG・K津田は絶えず「頑張らうぜー」と叫び續けてゐる。さういつて聲を張上げ味方を勵ましてゐる彼は、何だか大變可愛らしい氣がした。

それにしても、敵がゴールに殺到して來た時のG・Kの任務は、大きな屋臺骨を一人で背負つてゐる感じである。最後の五分前、川本のシュートが津田のプラインドを衝いてゴールインした時、地上に身を投出してありつたけ兩手を延ばした津田の姿は悲壯だつた。

私の同伴者は次男で、彼は一高の蹴球の選手だけれど、私はまだ彼の試合を一度も見たこと

がない。どうやら母親の役割は試合を見るのではなくて、泥まみれのバンツやユニホームを洗ふことにありさうである。（昭和十一年）

美にして驕らず

今から十數年も前、千ケ瀧の或る別莊に私は一人の美しい少女を發見した。發見したといつても間近かに顏を見たのではない。たゞ時たま行きずりの垣間見に何といふ奇麗なお嬢さんだらう、いまにどんな素晴らしい美人になることかと、心密かに三歎してゐたのだつた。それが今日のO氏夫人よし子さんである。

私はよし子さんの娘時代を知らなかつた。だが在りし日の美貌の少女が忽然人妻となつて私の前に現れた時、私は決してその娘盛りを見ないで過ごしたことを悔いなかつた――それほどよし子さんは匂ひこぼれる程の美しさの中に、多分の初々しさを湛へてゐたのである。そしてその初々しさは母となつた今日も、少しも損はれないでゐる。よし子さんは極く卑近な例をとれば、銀座を歩いたら擦れ違ふほどの人が悉く振返つて見る美しさだといつたら、一應は解釋がつくだらう。然しよし子さんの本當の美しさは、何百人の視線を一身に集めようとも、微塵

もその美しさに驕る心のないところにある。だから私はよし子さんが豪華な着物に身を包んで眩しい程に輝やかしく見える時よりも、却つて無造作にスウエターでも着てゐるふだん着の方が、その美と氣品が最もよく身についた自然なものに感じられる。こんなに美しくて素直な心を持つてゐる人を私はまだ見たことがない。

よし子さんと向合つてゐると、私はよし子さんの人柄から溢れ出るほのかな香氣みたいなものに、つひうつとりとなつてしまふあの印象は忘れ難い。それはあの端麗な顏立ちを包む貴い雰圍氣なのである。

それにしても辛辣な映畫批評家であるO氏は、どんな名畫にも一應は難癖をつける傳で、こんな得難い美人を妻にしてゐるといふ、まるで萬暦赤繪のお皿を臺所道具に使つてゐるやうな果報さを、とんと當りまへみたいな顏してゐるのである。（昭和十四年）

高原のコートで

千ケ瀧テニス倶樂部も、今年第九回のトーナメントを終つた。昔まだ倶樂部のないころ、石ころだらけのコートで一緒にテニスをした人たちが、學士になり、奥さんになりして、一人殘らずコートから姿を消した今では、たまさか試合を見に行つてもすつかり顏觸れが一變して「おばさまもせんはテニスをなすつたのですつてね。」といふお孃さんさへなくなつた。

若い人たちが次ぎ〳〵に入れかはつては、やがて世の中に巣立つて行くテニス倶樂部は、いはゞ學生時代の最後の足溜りみたいなもので、大學生になつて髪を光らせ出したかと思ふと、もうすぐ卒業だ、就職だ、とテニスもしてゐられなくなつてしまふ。淺間山の煙悠久なる千ケ瀧も、人の流れは一年としてとゞまることがないのである。わけてもお孃さんたちは、お嫁に行つたが最後、否應なしにラケットと永のお別れである、そんなことを考へ〳〵テニスを見てゐると、若い人たちに一日でも永くその若い日を樂しませてやりたいやうな氣持がして來る。

それにしても、千ケ瀧に別荘の數が年々何百と殖えて行く割に、何とテニスをするお嬢さんの寥々たることよと、私はそゞろ怪しまずにゐられない。そしてそれは、多分お嬢さんたちがスポーツ嫌ひなのではなくて、お母さんたちのスポーツに無理解な心理の致すところであらうと、歎かずにゐられないのである。つひこの間も或る學者の奥さんが、千ケ瀧も大變風紀が紊れたと憤慨してゐられたのを聞くと、それは若い女がショート・パンツで横行濶歩してゐるのがお氣に觸つたのであつた。ショート・パンツで歩いてさへ惡ければ、その服裝で男の人と一緒にテニスをしては、なほ惡いに違ひない。

千ケ瀧に、かつて一人の美しい令嬢がゐた。するとその令嬢がテニスコートに現れるたびに必ずお母さんがついて來る。どんな日にも、一日としてついて來ないことがない。そのお母さんは溫容掬すべき貴婦人で、いつもニコ〳〵と娘のテニスを見てゐる。しかし若い學生たちにとつて、その無言の監視は少からず彼らの自尊を傷つけられるものだつた。

「オイまた來てるぜ。」

「蟲除けかい。まるでナフタリンだね。」

「なあにホドヂンだよ。よく利くからね。」

といふやうなわけで、マダム・ホドヂンの異名は、今もテニスコートの語草になつてゐるのである。

私は、若い時にスポーツに親しまないのは人生の不幸だと思つてゐる。だから折角避暑地に來てテニスコートがあるのに、そつぽを向いてゐる若い女性に、同情と反感のもつれ合つた氣持を抱かずにゐられない。見てゐて一番嬉しいのは、一家揃つてラケットを持つ人たちである。殊に奥さんでテニスをする人を見ると、さうした幸福を妻に許してゐる男性に對して敬意を表したくなるのである。

花・きもの

このごろは庭の紫陽花が盛りである。私はどちらかといへ何の花でも折るのは嫌ひで、花はそのまゝ地上に咲かせて眺めるのが好きだけれども、紫陽花だけはあまり澤山咲くので、つひ惜氣もなく切ることにしてゐる。折柄の梅雨にぬれて徑一尺もあらうといふ大きな藥玉のやうな花が、地にすれ〳〵に伏してゐるのを見ると、切つて瓶にさした方が花にも幸福であるかのやうな氣がするのである。

一本の紫陽花は稍花が小さいが眼のさめるやうな純粹の青い色、一本の方は極く大輪でほのかに紅を含んだ藤紫である、どちらも實に美しいが、わけても青い色の花は夏といふ季節をそのまゝ象徴化したやうな清新な感じに充ちてゐる、私はいつもこの花を愉しい思ひで眺めながら、この美しさをさながらに身につける日本の着物のよさを今更のやうに思ふのである。

着物には昔から季節々々の花の約束がある。これは洋服にはない日本人的な感覺であらう。日本人の生活はいつでも四季と結びついてゐる。文學も美術も音樂も季節の感覺を忘れては成立たないのが、日本人の特性である。その意味では着物の模様も亦立派な藝術的表現だと思ふ。日本の女の着物には古來の名畫がそのまゝそつくり寫し出される。光琳、宗達の花鳥も、雪舟、雪村の山水も私達着物にし帶にしてゐる。こんな着物は世界中何處を探してもないだらう。さうした美的價値はもつと高く評價されてもいゝと私は、日本服のために一言辯じたい氣持がするのである。

この頃着物はあまりいぢめられてゐるやうだ。派手だ〳〵と到るところで叱られてゐる。多分着物が昔からの約束を守つて、櫻や菊や朝顔や秋の七草位の模樣で滿足してゐたら、又それにふさはしい優雅な色彩で制限されてゐたら、こんなことにはならなかつたかも知れない。併し着物はあまり多方面に模樣と色彩をむさぼりすぎ、强烈な表現に走り過ぎた。だがこれは誰の罪でもあるまい。すべては時代の流れである。いかにせきとめられても亦何處かへ流れてゆく時代の姿である。

美しいものは時に憎まれる。けれども人間が根本的に美を愛する限り、憎んでも憎み切れる

ものではない。美しいものは如何に虐げられても亡びることはないはずである。

私は世にいふ着道楽には賛同しがたい氣持だけれども、又まるつきり着物に無關心な婦人もどこか感覺に缺陷があるやうな氣がしてまことに物足りない。着物が生活の禍ひにならない程度で、生活の喜びになつてゆくその中庸を得ることが、一番望ましい態度だと私はさう思つてゐる。

藝者だとか女優だとかその他の所謂派手な職業を持つ人は、着物も亦職業的な必要品だからそれがたとへば贅澤の範圍にまで及んで行つても、咎むべきではないだらう。けれども普通の婦人でさういふことを生活の目標にしてゐるのは、その人から着物の價値を差引いた後に、何が殘るかと思ふと一寸淋しい氣持がする。

併し又高名な婦人で、いかにも私は着物なんか問題にしてゐませんといふやうな無趣味さを標榜してゐるのを見ると、殊にそれが教育家であつたりすると、私はいつも女子教育といふものゝ片輪な一面を見せられたやうな氣がするのである。

私は先日東劇で西崎緑さんの鏡獅子を見て、着物の好みのよさに感心した。一見平凡な藤色の裾模様だつたといふだけで、ぱつと眼を射る強い印象は殘らなかつた代り、いつまでも心の底にしみ透つてゐるやうな上品さとなまめかしさは、何といふ深い魅力であらう。あゝいふのが本當の洗練された趣味といふのであらうと感服したことであつた。（昭和十四年）

スーツの美

簡素の中の美しさ――といふことが、このごろの服飾美のモットーになつてゐる。

七・七禁令以來豪華な美しさといふのは姿を消したわけだが、實際あまりお金のかかつた贅澤な美しさといふものは、壓倒されるやうな感じばかり強くて親しめないものである。殊に若いお嬢さんが、上から下まで新柄陳列會から引抜いて來たやうな高價な和服を着てゐるのを見ると、一見、この幸福さうな女性が却つて不幸なのぢやないかといふ、反動的な氣持さへ起つて來る。何故なら、この人は尊い勤勞の生活を知らず、又自分自身を支へる生活能力は、もとより身につけてゐないらしいからである。

近頃目につくのは地味なスーツを着た若い女性である。スーツの性格は有閑的でなく、事務と職業に結びついてゐる。それだけに、スーツを着た女性には、不思議に理智的な活々した美しさがある。新しい服飾美は、かういふところに生れてゐるのだと思ふ。（昭和十四年）

山莊雜記

避暑地といふもの、私はたつた一つしか知らない。それは輕井澤の隣の沓掛驛から半里ほど淺間山麓へ寄つた千ケ瀧で、さういへばあゝあすこかと頷く人が多くなつた程、相當名の賣れて來た土地である。私達の家族が初めて千ケ瀧に夏を送つたのは、大正八年の事で、その時二つの赤ン坊だつた次男が、角帽を被つた帝大生になつてゐるその間の歳月が、千ケ瀧の原始的な相貌をすつかり變へてしまつたのも、當然至極のことながら、さて千ケ瀧といふところを頭に浮べるとなると、いつでも昔の面影が先づ眼にちらついて來る。それは例へば古い東京人が向島の土手はよかつたといふが如き類で、自然を破壞して向上して行く避暑地文化の現實の前には、單なる先住人の感傷に過ぎないのである。

實際昔の千ケ瀧はよかつた。自然が自然のままの美しさだつた。そこら一面秋草の花盛りで、萩、桔梗、女郎花など秋の七草はいふも愚か、幾十種と數へきれない程花が咲いてゐたと話し

てきかせたところで、バスの砂塵を浴びてそれでも喜んで住んでゐる今の〻達には、少しもその實感は起りやうがないだらう。大體土地會社の手で賣出された避暑地が、年年俗化して行くことは當然の運命で、俗化は則ち便利になることであり、便利になることは〻間が殖ゑることを意味してゐる以上、それがいやなら他所へお出でといはれても仕方がない。恐らく避暑地といふ名のつくところはどこも似たやうなものだらうと思つてゐる。だから私は避暑地に家を建てる人に警告したい。それは決して自然の美しさにだけ惚れ込まないやうにといふことである。避暑地の雰圍氣を造るものは、自然に非ずして人なりといふことを、先づ考へて腰を下ろさないと失敗する。

鬼押出といふところ、これも千ヶ瀧の發展につれて宣傳價値百%で、一度は見ておかなければならない名所となつた。私が初めて押出に行つたのは昭和二年の夏で、總勢十人づれ、一日がかりでお辨當を持つて、淺間山の麓を半廻りほど歩いて往復したのだつた。其頃は押出行といへば大仕事で、それだけに樂しみも深かつたが、今ではバスにゆられて女車掌の名説明に腹の皮をよりながら、たつた三十分で行つてしまふ。まことにあつけない位便利になつたものである。そしてしかもその押出の熔岩の上には、岩窟ホールといふ多角形の四阿みたいな大きな建物が建てられてしまつた。お陰で昔の鬼氣人に迫る押出の凄愴な雰圍氣は、根こそぎ洗ひ去られ、百數十年の昔、天明の大噴火に押出されたこの岩の下には、數千の生靈が埋つてゐるなどと、考へたくても考へられない程、明朗な遊覽場所になつてしまつた。この次ぎには岩の上をならしてドライヴウエイが出來るとやら。

けれどもそれで押出が破壞されたと嘆くのは早い。幅一里、長さ三里の大熔岩の流れは、口許に岩窟ホールの一つや二つ出來たつて、奥の怪奇は計り知れないものらしいのである。岩傳ひに二三町も奥へ行くと、四邊に人影らしいものが見えなくなり、そゝり立つ不思議な大岩石の姿が、巨人の像とも猛獸の咆哮する樣とも、自雷也の蟇ともゴリキーの顏とも、見れば見る程妖しく凄く、空は晴れ小鳥は囀る白日の下にありながら、魑魅魍魎に取圍まれたやうな寒氣を感じるのは、あながち私の臆病なせいではないらしいのである。

高原の夜は靜寂そのものである。晝間は人間が餘りに多過ぎて息苦しい千ヶ瀧も、夜は地上に露が光り天上に星が輝いて、人間の姿は底深い闇に呑まれてしまふ。高原に仰ぐ星は、清澄

な空氣と視野の廣さとで、ぞつとする程美しい。或る年東京から來た若い歌舞伎役者が、つくづくと空を見上げて「へェ！　星つてこんなに澤山あるものなんですか」と驚き聲を洩らしたのは、都會人の實感が籠つてゐて面白かつた。こゝへ來て天上の星を眺めると、天地悠久といふ感情が自ら身體の中を流れる。これは東京の夜では決して味へない氣持である。

先年防空演習が初めてこの避暑地にも行はれて、山のホテルのネオンも消え、別莊の窓から洩れる燈火も一つ殘らず姿を隱した時、物好きに歩いた夜の散歩は、街頭の光さへない昔に歸つて、ただ自然の作る明暗が、高原の夜を一層神秘的なものにしてゐたのだつた。たまゝ向ふから歩いて來る人の姿が、ま近に顏をすれ合ふまで誰とも解らないのは殊更興が深い。そんな時知つてゐる人に會ふ喜びは、人間に飽きたといふ心理とは、凡そうらはらなものだつたのも皮肉である。

千ケ瀧での樂しみの一つは朝の食事である。八疊と六疊と二間きりの家の椽側に、籐の丸テーブルをさし挾んで、竹の椅子によりかゝりながら、紅茶をいれてパンをゆつくり味はふのは、何ともいへずゆつたりした氣持だ。

我が家を包む赤松の林は清淨な高原の空氣をいやが上にも淨化して、澄んだ朝の氣が心の底までしみ透るやうな氣がする。松は十數年の間にすぐれた大木になつた。茂つてゐるのは松ばかりではない。その下は一面の雜木林で、山紫陽花や白樺や小梨やつゝじや、その又下草の山うど、すゝき、虎杖の類が伸びに伸び、茂りに茂つて一面の八重葎である。目の及ぶ限り松と雜木と雜草の綠に塗られた一幅の畫面は、千ケ瀧が土地會社の經營に屬する以前――つまり東長倉村々有地の昔からの、そのまゝの面影を傳へてゐる。これが私達には堪らなく嬉しい。斧も加へず鎌も入れないかうした自然のまゝの木立の中に住むこの味はひ、濃淡さまゝな綠の美しさを心ゆくまで嚙みしめながら、朝の食事を樂しむ一時は、恐らくこの山莊生活の醍醐味ともいへよう。聞け、郭公も鳴いてゐる。鶯も高音を張つてゐる。――

だが私達のこの自然鑑賞はどうやら別莊地の異端者扱ひであるらしい。

「これア草を刈るとすばらしい庭になりますなあ。Sさんの庭を御覽なさい。お宅だつてこれだけ立派な松があれば、あれに劣らない庭になりますよ。」

さういつてくれる人がある。主人が「いやこれで立派な庭ですよ」といふと變な顏をする。

中には又伸び過ぎた髪の毛でも見るやうに、うつとうしい顔をして、

「これぢやあ虫が多いでせうね。ちと下草を刈り取ると風通しがよくなつて、松がよく育ちますよ。」

と注意してくれる人もある。

どうも東京人は松を鑑賞することだけ知つて、雜木の美も雜草の美もてんで無關心らしいのである。Sさんの庭のやうに千坪あまりの廣い地面に、松ばかり殘してあとは奇麗に草も木も引つこ抜き、その代り美しい苔が一面に生えて、高砂の尉と姥に熊手を持つて立たせたいやうな上品な庭は、餘りにも貴族趣味で、私達の山の氣分を求める氣持とは遙かにかけ距つたものだ。ましてや草を刈つた後につゝじをわざとらしく植ゑ込んで、石燈籠を置いたりする御料理御旅館式の人工庭園に至つては、俗趣味といふも愚かである。東京人は植木屋の造つた庭でなければ庭でないと思つてゐるその氣持の延長が、こんな自然の美しさを冒瀆し破壞して、山中にわざ〳〵俗天地を出現させてゐるかと思ふと、益々我が家の原始林の尊さが增すばかりである。

雜木といへばこゝでは小梨の木が大變虐待されてゐる。若し人が五月に來てその名の通り梨の花をちいさくした眞白な花を、こぼるるばかりにつけた小梨の美しさを一度でも見たり、或は又十月になつて櫻んぼのやうな小粒の實が、一粒々々金泥の地に紅を刷いたやうな奇麗な色で、鈴なりになつてゐる可憐さを一目でも見たら、誰もこの木を伐らうとは思ふまいが、生憎その時季に來る人は稀れだ。東京人は夏だけ來て、徒らに葉ばかり茂る藝のない木だと思ひこみ、この木の存在に一顧の價値をも感じないでゐる。

私の家の隣の地面を千坪程買つた金持も、型の如くつゞしと松だけ殘して下草を刈り取り、その序に大きな小梨の木を何本もむざ〳〵伐らせてしまつた。その地面の中を私は人夫のぢいさんと一緒に歩きながら、束にして轉がしてある小梨を見ては、惜しい惜しいと何遍も繰返さずにはゐられなかつた。

「まつたくでございます。東京の方は花の咲く時を知らねえもんで、葉ばかり茂ると思ひなさるののだね。」

そのぢいさんもさういつた。

「だから貴君方がさういつて上げればいゝのにね。これはきれいな花が咲きますといへば、何もかう無暗に伐らせないと思ひますがねえ。」

私はつひ田舍の人の氣の利かなさを齒痒く思ふのだが、彼等にして見れば小梨の木を伐ること位、何でもないことなのだ。東京人のいひなり次第にあつちを伐つたりこつちを刈つたりすれば、賃金が得られるのだから、庭を造る金持は彼等にとつて大切な福の神だ。田舍の人が働いてゐる時悠々と避暑する都會人は、その罪亡ぼしに庭を造つて彼等の生活を救濟するといふ理論も成立つだらう。して見れば私達のやうな草茫々趣味は、何も田舍の人をうるほすことを知らない愚かな個人主義であるかも知れない。

いつかもグリーンホテルの前の道路工事をしてゐる時に、實に美事に四方に枝を擴げた小梨の大木が、丁度切崩される地面は植つてゐた。いや植つてゐたのでなく生えてゐたのだ。私は偶然そこを通りかゝつて思はずも足をとめ、伐られるこの木の運命に深い哀愁を感じないではゐられなかつた。

人夫にきけば、トラックの序さへあれば家の地面まで持つて來てくれるといふのだ。私はそれをうちの地所の何處かに植ゑたかつた。有りがたいことに東京の庭とちがつて何處にだつて植ゑる餘地は有りあまつてゐる。木はタヾだから人夫に若干かの心づけをやればいゝと、さう思つたものゝ一應主人に話して見ようかと、いつになく獨りぎめにしないで、いづれすぐ又來るからと家に歸つたが、其のまゝつひ忘れるともなく夕方になり夜になつて、それぎりになつてしまつたことがある。

後で考へてつぐ〴〵とその木の運命があはれであつた。だが私の見たのはたま〳〵その一本で、この土地の拓けるまでには既に何百本といふ小梨が伐られたかも知れない。そんな感傷に浸る位なら土地會社の地面なんかには住めないわけだと、我れと我が身の矛盾を嘲りたくもなるのだつた。（昭和十五年）

旅の手記より

彼女

春の休暇も花の季節もすぎたせいか汽車は大變すいてゐる。初めて乘つた三等特急の櫻は成程乘心地がよかつた。知つてゐる人にはいふだけ野暮だが、前がガチャンと引出されて食卓にもなれば、手紙も書けやうといふ設備は却つて二等車にはないことだ。慾には鐵道大臣よすべての三等車をこれ位にし給へ、といひたくなる。

京都まで隣合せたのは或る御大家の小間使だつた。彼女の主人夫婦は一二等の富士の方へ乘るのださうだ。お伴よりも獨りの方が氣樂だといふやうな事から、彼女はそれからそれへと彼女の幸福なる女中生活に就て、いろんな事を話してくれた。彼女の主人が如何に豪奢な生活をして居るかは、京都に本邸があり、大森に別邸があり、それにも飽きると帝國ホテルや甲子園ホテルを泊りあるく……といふやうなことで窺ひ知られた。だからさういふ彼女も流行のお召の

の着物を着て水仕事なんかしさうもない綺麗な手をしてゐる。私は默つて彼女の話をきゝながら時々微笑ましくなつた。主人の生活をすつかり自分の生活にして、單純に喜び切つてゐる無邪氣さが却つて私には嬉しかつた。無自覺と云へば無自覺、無批判と云へば無批判の至りだが、然しそれでもいゝぢやないか、お金持の奥樣に可愛がられて滿足してお女中さんを勤めてゐるのなら、それで充分仕合ぢやないか……私は敢てさう思ひたくなつた。あんまりどこを見ても險惡な世相にはつく〴〵厭氣がさしてゐたから——。

階級闘爭なんてものに凡そ緣遠い彼女の存在は、飼はれたる猫の如きものかも知れないが、然しやたらに嚙みつきたがる犬のやうな人間よりは、好感が持てた。

關門海峽

朝、下關に着く。曉に降つた小雨がすつかり上つて、晩春とも思へない風の冷たさ、長いプラットホームを押流されるやうに歩いて行くと、やがて九州行と朝鮮行と連絡船への道が二筋に分れる。こゝで眼につくのは朝鮮の勞働者らしい旅行者の群だ。內地へ出稼ぎにでも來たのか、大きな荷物を抱えこんで、キョトンとしたやうな顏で默々としてゐる彼等——よく省線の

中なんかで見る惡くづうづうしい連中とはちがつて、ひどく肩身の狹さうなオド〳〵した樣子が心を惹く。――だがあの中にはどんな人間がどんな事を考へて居るかわからない――私は何だつたかそんなプロ小說を思出した。

連絡船に乘ると大阪朝日と毎日を賣りに來る。こゝではもう完全に大阪の勢力範圍だ。さう云へばセルの着物にセルの單羽織を着た若い女の姿も、東京では見かけないものゝ一つだ。

いつ動き出したか知らない中にもう船は關門海峽の潮の上にすべり出てゐる。めつたに船に乘る機會を持たない私は、たつた十五分の航路でも珍らしくて嬉しい。海上の交叉點は銀座の四辻とはちがつて、のんびりしたものだ。向合つてゐる山と山、町と町、どつちが門司だか下關だか、ぼんやりしてゐると錯覺が起つて來る。

大阪から同行した弟は高等學校程度の軍事的知識で、頻りに要塞の說明をしてくれる。

「あれが彥島、明治初年に英國があの島を貸してくれつて云つた事があるんですよ。あの時貸さうもんなら、それこそ飛んでもない事になつてたなあ。」

彼はそんな生意氣な口をきく。大方教官の受賣だらう。

「さうね、それこそ英國に咽喉を締められてゐる樣なものね。」

私もわかつた樣な口をきいた。こんな軍國的な會話は東京では嘗てしたことがない。關門海峽なればこそである。

佐賀の印象

佐賀の町の相變らず靜かなこと！　東京の目まぐるしい變化を見つけてゐる眼には、私の住んでゐた日露戰爭前後と比べて「佐賀も變つたでせう。」ときかれる挨拶に何と答へていゝか迷つた。實際どこがどう見違へるやうになつたと云ふのだらう。私は依然として商業都市でもなく工業都市でもない鍋島樣の御城下の佐賀の町を見る。チャチな――と云つては失禮だが――西洋館が一つや二つ出來たつて、どこに近代的な色彩があると云ふのだ。私はまだこの町のどこかに封建時代の香が殘つてゐるやうな、そんな感じを拒むことが出來ない。

だがそれは私にとつて、佐賀が見違へるやうな大都會になるよりも、どんなにうれしいことだか知れない。町を貫いて幾條も流れる小川、お社と云ふお社の境內に繁る樟の大木、それ等の一つ一つに何か知ら幼い日の追憶がよみがへつて來る――。

町はづれの小徑を川に沿うて歩いて行くと、水を掠めて頻りによしきりの聲がする。これを佐賀ではぎやう〳〵しと云ふが、その方が適切な名だと思ふ。町の盡きるところは見渡すかぎりのれんげ草だ。森もなく丘もなく肥前の平野はたゞ一面のれんげ草だ。昔見た通りに――。

九州人の買物

佐賀で有田燒の店へ這入つた。お連れは大地主の奥さんでみなりの立派さは何處へ出しても恥しくない貴婦人である。然しそこまではよかつたが、買物が始まると私はすつかり閉口した。何故と云つてその奥さんは猛烈に値切るのである。

一體値切つていゝのは圓タクと緣日の植木だけだと心得てゐた私は、ちやんと正札のついた陶器、しかも信用ある一流の店の品物を、頭から値切り倒す勇氣に驚いて、何と番頭が答へるか一寸興味を持つて見てゐた。

勿論番頭はまけるとは云はなかつた。それはさうだらう、値切ると云つても十錢や二十錢のはしたではなく十圓のものを七圓に、五圓のものを三圓にと云ふやうなひどい値切り方だつたから。然し奥さんは決してひるまない。あれかこれかと高價な茶器を見立てゝは先づ値段の交渉だ。「まけなさい」「まかりません」を何遍でも繰返してゐる。奥さんは頻りに前の番頭のまけつぶりのよかつた事を賞讃して、貴方ぢやいけない、なぜ前の人が居ないのだといつてゐる。奥さんの執拗さにも敬服したが番頭の忍耐力にも感心した。恐らく東京の商人なら「御冗談でせう」と怒つてたんかでも切るところだらうが、番頭は決して腹を立てずに應酬してゐる。

あまりきりがないのでうんざりしてよそを見てゐる間に、到々番頭の方が落城したらしく、やつと値段の折合がついて一組の茶器が買上げられた。

それから次ぎに或る洋品店へ這入つて、息子の嫁のために洋傘を買つた。お見立役を仰せつかつた私が一本選び出すと、奥さんは默つて十圓紙幣を出した。おや〳〵洋傘は値切らないのか知らと思ひながら店を出ると、あ、値切るのだつた！　といふわけで奥さんはも一度引返して、五十何錢かを取戻して來た。

私がこの話を珍らしさうにすると、これも或る九州男の曰く「そんなことはあたりまへだ。何の某とかいふ田舍大盡は東京の三越で買物をした時も値切つた。勿論三越はまけなかつたさうだが、店員からこの店のお客樣で値切つたのは貴君が初めてゞすと云はれたのを大に光榮と

して、それ以來博多あたりで買物をしては、おれは三越でさへ値切つたぞと自慢するさうだ。」——と。

それにしてもデパートのお客がみんな値切つて物を買ふとしたら、一體どんな事になるんだらうと、考へたゞけでもうるさいのは通越して滑稽になつて來た。

名　醫

或る小さな港町に開業してゐる私の從兄は京大出の醫學士で、その町の持つ最初の學士樣だつた人だ。今でも其地方では唯一の名醫なのだが其の從兄の話に、近くの島々から病人があつて迎へに來る時には、先づお酒を二三升持つて來る。そして發動機船か何かで其島へ行くと、診察が濟んでからもきつとお酒が出る。それがたとへ夜だらうと夜中だらうとお構ひなしなのである。そしてその爲めには前日から用意した酒肴が整へられ、特に先生のために白いお米の御飯まで炊いてあるのである。

「もうこの病人は駄目だ、お氣の毒だが助からない。」

と彼が最後の宣告を下すと、それでも「有りがたうございます」と感謝して、何が何でもその酒肴をすゝめる。そんな時にたとへ食べたくなくても何でも、お酒をのんで御馳走に箸をつけてさへやれば彼等は非常に喜ぶのだ。そしてたとへ病人が助からなくとも、先生に見て頂いたのだからとそれで滿足して諦める。彼を見ること恰も日本一の名醫を見るが如きであるさうだ。

この話は非常に私を感動させた。私はその中に流露する人情の美しさに、涙がこぼれさうになつた。それから見ると都會の生活は何といふ淺間しさだらう。私達が醫者に對して、醫者が私達に對して、何とお互に事務的であり職業的であることよ。私は從兄に對して日本一の名醫になるよりも、村の名醫である方が遙かに幸福であることを喜びたい。（昭和六年）

菊池寛氏の女性觀に就て

——戀愛と結婚の書——

近頃評判の戀愛と結婚の書を私は是非一度讀んで見たいと思つてゐた。といふのは私にも年頃の息子があるので、息子に讀ませたらどうかと考へたからだ。ところがやつとその機會が來たので高等學校へ行く息子に讀んでごらんといふと、三十分ばかりで讀み了つて至極つまらなさ相な顏してゐる。訊いて見ると「世間雜話の類だね、全然常識的だよ。」といふ。勿論この場合の常識的とは輕蔑を意味するのが白線時代の常識なのだ。それに對して多分「常識とはそんなに輕蔑すべきものぢやありませんよ。」といつて聞かせるのが、母親の常識なのだらうが、生憎私も常識をたいして尊敬出來ない氣持なのだ。何だかひどくやゝこしい物のいひ方になつてしまつたが、兎に角、偉大なる常識家である菊池寛氏の所論が、常識的であるのは驚くにも當らないとして、同時に極めて現實的で功利的な戀愛觀であり結婚觀である。人生からロマンテ

イシズムを追出し、理想主義にノックアウトを喰はせてゐる點、實にはつきりしたもので、そこがまだ高遠なものなどに憧れを持つ高等學校の生徒なんかには、氣に喰はないらしい。終始一貫した說のやうでも理論的に追窮して行くと、可成矛盾撞着の多いのも氣になる。これも併し人生とはこれ程理屈通り行かないものだと云ふ意味を、如實に示してゐるのかも知れない。

つまりそこにこの本の世間受けのする大衆性——いひ換へれば寧ろ卑俗性があるといへる。もう一つの感じはこの本が男の書いたものといふ印象の强さである。たとへば女の味方をして「男は怪しからん」と云ふ場合でも、山田わか子女史なら否定の意味だが菊池氏は肯定の意味だ。怪しからん男をそのまゝには置けぬ、膺懲しろと威丈高になるのは山田女史で、男の怪しからないのは大目に見て、女は損をしないやうに悧巧に立廻れと入智惠するのが菊池氏だ。

總じてこの本は戀をするにも結婚するにも悧巧に立廻る事ばかり敎へてある。菊池さんはよほど悧巧な女がお好きと見えるが、その悧巧さが何と又レベルの低い悧巧さだらう。高い敎養と深い內省とによつて渾然と磨かれた眞の聰明な女性なんてものは、菊池氏の眼には凡そ地上に存在しないらしいのである。實際私はこの本で初めて作家菊池寛氏の女性觀の低さを知つて

啞然とした。もう少しは進歩的な頭の持主かと思つたら實に案外だつた。氏にいはせると、「家庭生活に專門教育は不必要、女學校でさへ學問的であり過ぎる、英語や數學は全然役に立たぬ主婦は買物の勘定が出來て月末拂ひの總計が出來れば澤山だ。」と。では一體子供が小學校の上級生になつたら母親はどうすると聞きたくなるではないか。要するに結婚の相手としての女は小學校を出たゞけでも、悧巧でさへあれば學問があるよりましだ。一番必要な條件は料理の上手なこと、映畫スポーツ文藝等の趣味豊かなこと(但しほんの一通りである)綺麗好きなこと、それからも一つ――性的魅力。悧巧な女の代表的なものは料理店や待合を切廻す女將だといふのが、氏の女性觀の骨子である。こんなにも無造作にナメられてゐる女子教育と云ふもの、從つて又女子教育家と云はれる人達の溫和しいのが不思議だと、私は獨りで憤慨してゐる。

とは云ふものゝ慥かにこの本は教育家のいへない事をいひ、見せないものを見せて、戀愛と結婚を修飾のない裸にしてゐるところは、それが低ければ低いだけ現實に卽した力强さがある。從つてその半面に教育家の擔いでゐる婦道なんてものが、如何に實生活に無力な偶像であるかを說明して剩りあるものと思ふ。たゞもつと突込んでいつて欲しかつたのは、男に欺されることの愚かさを力說するならば、同時に欺されてすぐ死ぬ事を考へたり、又さうでなくても戀愛をすればとかく結婚か心中かその二筋しか行く道のないやうな、安價な死を選ぶことも極力戒めることである。若い人達がやたらに無慥作に心中する現狀に對して、もつと强い反省を促すことはこの本の當然の使命であつたと思ふ。

文藝によつて人生を正しく理解させよと云ふ說には心から贊成する。文藝は――殊に文學は――あまりに弊害ばかり責められて、これを善用することは全く忘れられてゐる。これは何も菊池さんが作家だから感じるのでなく、少し大きく眼をあけて見れば誰にだつてうなづかれる事だと思ふ。優れた作品を讀むことはそれ自身最上の教育であることを、恐い顏した女學校の校長さんや、やかましいのを御自慢の母親達に知らせたいものである。(昭和十一年)

穂積博士の民法を聽く

「やあこれはお珍らしい！　なに成人講座のお申込ですか、それはそれは、穂積さんの民法はたしかにお聞きになつといていゝものですよ。」

有名な安田大講堂の横手、摺鉢の底のやうな低地にある帝大の庶務課で課長E氏は愛想よく私を迎へた。成人教育講座の勸進元で、これはないしよだがフェミニストである氏は、女性の聽講者が年々殖ゑる事を嬉しさうに語りながら、も少し御婦人方のための話もあるといゝのだが――と付け加へた。

「いゝえ飛んでもない、御婦人方のためになんて云ふの眞平ですわ。さうでないところがいゝのぢやありませんか。御婦人方のために特に調子を下げたのなんか聞きたくございません。」

「成程……」

E氏はにや〳〵笑つた。何とかまぜつ返したいが、下僚の手前課長の威嚴を保つてゐるといふ顏じて――。こゝで私が受取つた聽講券は七三一番、成人教育講座も既に第一講が終つて、第二の穂積博士の「民法の由來と將來」が始まらうとする時である。

さて其夜になつた。ノートと萬年筆を風呂敷に包み、久しぶりに――實際二十五年ぶりに學生時代に歸つた氣持で、しかも帝大の門を潜るのは一寸愉快だつた。場所は法學部三十一番教室、教室と云つても流石帝大だ。いゝ加減な學校の講堂なんか足下へも寄れない廣さ、天井が無暗と高く、窓が大きく、電燈も氣前よく明るい。扇形に机と椅子が並び、椅子は天鵞絨張りで映畫館と同じに上げ下げする造り、開講二十分前といふのにもう一ぱいの人だ。見渡すと大體二三十代の背廣が過半だが、御老體もなか〳〵優勢で禿や白髮は勿論のこと、中にはもう床の間の置物にしてもいゝ程の童顏の老翁さへ居る。そのせいか講義中、あつちでもゴホン、こつちでもゴホンと咳の絶間がなく、これには一寸參つてしまつた。

女は總勢百人ださうだが、洋裝や模樣銘仙級の二十代が一番多く、それからずつと飛んで我々同樣の御年輩の人達、五十以上も二人ゐるといふから心強い。三十代の奥樣タイプの人が殆んど稀れだつたのは、その年代が一番家庭的に束縛されてゐる事と、も一つは所謂有閑階級の人

がその閑暇を精々手藝や料理の稽古に使ふ位で、頭腦の問題には無關心だといふことを示してゐると思つた。映畫の走りを觀る事を以て誇りとする世のインテリマダムも、特賣場の堀出物を得意とする世帶上手も、こゝにたつた五十錢玉一つで、勿體ない程いゝ話が聽けるといふことを知らないのかと、私は講義を聽いた後で、つくづくと慨歎したわけである。尤もこれは主催者たる文部省と帝大の、御役所式な宣傳不行屆にも責任はある。よろしくもつとぢやん〳〵宣傳すべしである。

正面兩側の時計が六時三十分を示すと、待ち兼ねた穂積博士が講壇に現れ、簡單な紹介がすむとすぐ講義が始まつた。最初は抑々民法といふものゝ內容の說明からだが、法律の話なんか乾燥無味だらうと思ふ人は、まあ一度博士の講義を聽いて御覽なさいといひたい。文字に書けば四角な堅い知識もこれ程平易にこなされ、これ程しつくり解らせて貰へるものかと、全く感心してしまつた。この感心は回を重ねるに從つて益々其の度を强くしたのだが、種々の面白い判例や挿話が數限りもなく引用され、それだけでも一冊の本になるかと思ふほどの分量で、あの獨りで聽くのは惜しい！　とつくづくさう思つたのだつた。講義は二時間きつちりで前後五回に亘つたが、それだけの時間に私は學校で一年の授業料を拂つたよりも、澤山の事を知つたやうな氣がする。それにつけても女といふものゝ知識の淺さよ。お互ひにもつとしつかりしたものをつかみたいものだなあと、自づと溜息が出るのだつた。

問題が民法の由來と將來であるだけに、昔から今までの時代相と法律的觀念との交錯に非常に興味のある事實が多かつた。時代の流れが法官の頭を動かして、新らしい判例を作り、それが遂には法律の改正をも餘儀なくさせる徑路、それから民法が絕對の個人主義から次第に共同主義に變つて行く目下の大勢、そして法律の或者は（例へば債權法や商法の如き）漸次國際的に統一されてゆく氣運にあること等は、誰でも時代に關心を持つ者の知つておくべき事だと思つた。

例の民法改正問題は、特に重きをおいて話された。博士も當面の委員であるだけに、その苦心をも交へて、家族制度の實質化、婚姻、離婚、庶子、私生子の地位、親族會等の個々の箇條に就てそれぞれ要旨を說明されたが、改正の守本尊みたいになつてゐる「我國の淳風美俗」といふ觀念が甚だ封建的で、寧ろ時代と逆行する改正をさへ敢てしようとする點に就ては、もつと

突込んで批判して貰ひたかつた。これは恐らく樞密院あたりの御老人の意見でゝもあらうか。博士は穩健に反對を表示されるだけで、紳士的ではあるがそれだけに物足りない感じがした。

又、改正案では多少女性を優遇してゐるとはいへ、根本的に差別待遇を撤回したのでなく、今まであんまり可哀想だつたからある程度のお情に過ぎないのは、何といつても心細い。現在では一九〇七年に出來たスイス民法が、最も完備した民法であると博士はいはれたが、そこではどんなに女性が扱はれてゐるか、知りたいものである。

博士は舊約聖書を愛讀してゐられるさうで、所々にその句を引用され、又論語も度々引合に出た。それは如何にも博士の溫厚篤實な人柄にふさはしい感じだつた。實際博士の講義を聽いてゐると、音にきく「穗積さんの民法」のうまさに陶然となる一方、成程これが本當の學者かと心から信賴し安心する氣持が湧いて來る。これは場當りや前受けを狙つた話には、絕對に起らない氣持だ。一言一句も聞き洩らすまいと緊張し切つた氣持で、ノートに萬年筆を走らせながら、時々博士の所謂「餘談」の面白さに、思はず一同と共に和やかな笑聲を立てたあの教室の思出は、いつまでも忘れられない喜びである。（昭和十年）

漱石先生

私が曾て夏目漱石先生に師事して小說を見ていたゞいた事は、これまで殆んど口にしないことにしてゐた。それはもし私が一人前の作家として立つことが出來たなら、喜んで先生のお名前を公にして自分の履歷を飾つたかも知れないが、モノにならずじまひだつた私が先生の弟子の一人だつたと自ら語ることは、先生の偉大さに對して餘りにも憚りの多い氣持が先きに立つからであつた。けれども今日となつていろ〳〵な人から先生の思出が語られるのを聞くと、私も自分の記憶に殘る先生の面影を、朧氣ながらでも書きとめておきたい氣持に驅られる。思へば私が初めて先生の漱石山房の門を潛つた時から、三十年餘りの月日が經つてゐるのである。

時は明治四十二年、私が目白の國文科の多分二年生の時だつたと思ふが、其頃作家になりたい一心に燃えてゐた私は、或る日大膽にも西洋美術史の講義が終つた時、教室から出ていらつしやる大塚保治先生を待構へてゐて、夏目さんに紹介して頂きたい、といきなり不躾なお願ひ

をしたのだつた。大塚先生はいふまでもなく美學の權威で、先生の奥様は又女流作家として當時有名だつた楠緒子女史であつた。私は何かで大塚先生と夏目先生の御懇意なことを知つて、さういふお願ひをしたのである。序でながら大塚先生の西洋美術史はその頃最も私達の憧憬の的だつた講義で、教室の席次なども至極自由だつたのを幸ひ、倫理學や教育學の講義にはいつも最後列の注意人物席といはれる場所に引込んでゐるくせに、大塚先生の時間になるといち早く最前列に陣取つて、先生の一言一句も聞き逃さじと懸命にノートを取る私であつた。併し先生は生徒の顔も名前も少しも御存じはないのである。だからいきなり先生を捉まへてそんな事を切出すのは、今でいへば相當心臓の強い行動だつたのである。

ところが大塚先生は思つたより手輕く私の望みを叶へて下すつた。それがどういふ順序でどう私に傳へられたか殘念ながら憶えてゐないが、とにかく、間もなく私は夏目先生のお宅に伺ふことになつたのである。

初めて夏目先生の書齋で先生にお目にかゝつた時、先生はいろ〳〵家庭の事など訊いていらつしやる中に、「あゝ神崎君か、それなら知つてゐる。神崎君のお嬢さんが小説を書くやうになつたかなあ。」とおつしやつた。私の父は法科で先生より先輩だつたが、後の岸清一博士等と一緒に、當時日本で最初のボートの選手として大學時代は有名だつたさうで、先生も顔位は知つていらしつたのである。和服にセルの前かけをしていらしつた先生は、私には丁度お父さんのやうな年輩の方に見えた。

それから私は毎木曜の面會日にちよい〳〵先生のお宅をお訪ねした。一番最初に持つて行つたのは、今考へると可笑しい程趣向を凝らした短篇で「これやあ大々的小説だね」と先生に笑はれたことを覺えてゐる。そしてもつと素直に自分の身邊のことから書けと教へられた。當時は丁度自然主義の盛んな時で、一方それに對して帝國文學などには反對の文學論が掲げられ、何が本當なのか判斷がつかないまゝに先生におたづねすると、「丁度火箸の兩端を持つた人が片一方は冷い、片一方は熱いといふやうなものさ。」と、先生らしい答をなすつたが、その時分の私には先生のお言葉の意味が、本當に解つたとはいへなかつた。

先生は私に英語で小説を讀むことをおすゝめになり、ドウデエの短篇集を貸して下すつた。けれども田舍の女學校出で語學の力の乏しい悲しさは、その短篇を讀むのが一通りの苦心では

なかつたのである。結局私にとつてそれは力に餘る仕事として中絶せざるを得なかつた。私が若し東京の女學校出で、も少し英語の素地が作られてゐたら、先生のやうな得難い良師に導かれることが、どれほど幸をしたか知れなかつたのにと思ふと、そればかりは取返しのつかない殘念さである。

先生は大變に親切な師であられた。書いて持つて行つたものは大抵その場でお讀みになり、辛竦な批評をなさるのだつた。或時先生がかうおつしやつたことがある。

「これはまるで頭もなければしつぽもない、何處を切つても同じやうな味のするまあ蒲鉾みたいな小說だね。」

先生のお言葉を聞いて私がかういつた。

「でも先生、德田秋聲の小說もやつぱり蒲鉾みたいぢやございませんでせうか。」

先生は私の不遜な抗議に對して笑ひながらおつしやつた。

「蒲鉾は蒲鉾でもこつちの方は豆腐が多い。」

又或時先生に何か書いていたゞく積りで短冊を持つて行くと、先生はその安つぽい短冊を手にして「お寺の唐紙だね。」と惡口をおつしやりながら次のやうな詩を書いて下すつた。

日似三春永　心隨野水空
牀頭花一片　榮落小眠中

漱石

私が今日まで記憶にとゞめてゐるのは、さうした先生の機智縱橫なお言葉のきれ〴〵ばかりで、肝腎の小說論乃至文學論に至つては、何一つ憶えてゐないのは何とも申譯のない次第である。それは要するに、その時分の私が先生の御說を本當に理解し體得するだけの力がなかつたからともいへるし、又それ以來引續き文學的精進を續けなかつたゝめに、大切なものを皆失つてしまつたのだともいへよう。

たゞ先生はいつも嫁に行け、嫁に行けと仰つしやつた。嫁に行つて亭主を持つたり子供を持つたりしなければ小說は書けないと、先生はいつもさう仰つしやつたが、當時の私にとつては結婚生活と作家生活とは到底兩立しないといふ不安の方が遙かに强く、獨身でゐる方が小說が書けさうな氣がした、何といつても私は若かつた、といふより寧ろ稚なかつたのである。

當時先生の女弟子といへば私より前に師事して居られた法學博士山田三良氏の夫人しげ子さんだけのやうであつた。山田しげ子夫人は有名な江川太郎左衛門の孫に當る方で、先生の早稲田南町のお宅と程遠からぬ辨天町に住んで居られ、私もよくお宅に伺つて大變親切にしていたゞいた。山田夫人にも久しくお目にかゝらないが、その當時の御厚意はかげながら深く感謝してゐる。後に三宅やす子さんが入門されたことを先生から伺つたが、遂にお目にかゝる機會がなかつた。

木曜の面會日には時々鈴木三重吉氏にお目にかゝつた。又津田青楓氏もよく見えて先生のお描きになつた繪を批評して居られた。先生が内幸町の胃腸病院に入院していらつしやる時お見舞に伺ふと、誰だか知らないが若い方が二三人、先生と一緒に文學の話をして居られたことがある。私はそのお仲間入りをする程勇氣もなく素養もないので、早々にお暇したが、その時のいかにも師弟の交りの深さを思はせるやうな和やかに打解けた光景は、後々までも心に深く殘つてゐた。その時分の先生の日記の中に「神崎のお嬢さんが花を持つて來た」とあるのは私の事である。

私が先生のやうな自分に過ぎた方を師と仰いだのは、まつたく勿體ないやうな幸福であつたが、書いて持つて行つたものといへば、たかゞ作文に毛の生えたやうなものばかりで、さぞ先生は御迷惑であつたらうと思ふ。たゞその中で私が目白を卒業した明治四十四年の夏「傍觀者」といふ三十枚ばかりのものを書いた時、初めて褒めていたゞいて新小説に載せて下すつた。自分の作が初めて世の中に出た時の私の嬉しさは天にも登るばかりであつたが、それから後は書いても〳〵滿足なものが出來ず、大正四年に私が結婚した翌年、先生はおなくなりになつたので、遂に私の弟子としての成長は遂げる望みのないはかない夢に終つてしまつた。

今では私の處女作――本當に文字通りの處女作であつた「傍觀者」の一篇も私の手許にはない。何處かの圖書館へでも行つたらその古い新小説があるかも知れないが、それをわざ〳〵探し出すほどの熱もなくなつた。あの頃の小説を書きたい一心に、ありとあらゆる生きる望みをかけてゐた自分の姿が、もはや今の自分とはまるで違つた人間のやうに自分の心に浮んで來るばかりだ。それは自分にとつては愛すべき若き日の肖像である。

私は今あの兩側に庭を控えた稍薄暗い先生の書齋に、いつも穏やかな併し何處かに皮肉な表

漱石先生

情を浮べて、きちんと座つてゐらしつた先生のお顔を、文豪夏目漱石の外所行きでないお顔を、そしてそのまへに小さくなつて畏まつてゐた自分の姿を、秘めたたる一幅の繪としてなつかしく思ひ出してゐる。（昭和十六年）

昭和十六年六月廿三日印刷
昭和十六年六月廿五日發行

明日の女性
定價壹圓五拾錢 ㊐
外地壹圓六十五錢

著者 平井恒子

版權所有

發行者 東京市豐島區西巢鴨三丁目七〇三 長崎次郎

印刷者 東京市牛込區改代町二四 田中末吉

理想社印刷

發行所 東京市豐島區西巢鴨三丁目七〇三 長崎書店
振替東京七一八八六番

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

吉田喜久代著　砂丘の蔭に　元版四五〇頁　定價二・〇〇　送料・一四〇

小川正子著　小島の春　定價一・二〇〇　送料・一・〇〇
（特裝）定價一・五〇〇

青山一郎著　獨逸・の砂　定價一・四〇〇　送料・一・〇〇

浦野芳雄著　ブルーノ・タウトの回想　定價一・八〇〇　送料・一・〇〇

土井八枝著　隨筆　藪柑子　定價一・八〇〇　送料・一・〇〇

松谷義範著　飯　―食生活の問題―　定價一・〇〇〇　送料・一・〇〇

平井恒子著　明日の女性　定價一・五〇〇　送料・一・〇〇

邑樂愼一譯　近代支那傳說集　子不語　定價一・八〇〇　送料・一・〇〇

長谷川兼太郎著　滿蒙鬼話　定價一・八〇〇　送料・一・〇〇

今泉みね著　名ごりのゆめ　定價二・五〇〇　送料・一・四〇

桝宮照子著　月鳳里の歌　定價二・五〇〇　送料・一・四〇

東京市豐島區西巢鴨三ノ七〇三　長崎書店　振替東京一八七八番　口座六八〇〇番

905
238